

そもそも端午の節句とは、五月の端（はじめ）の午（うま）の日、つまり「端午（たんご）」に由来するといわれ、災厄や疾病をはらう力があるとされた菖蒲酒を飲んだりして、邪気とが咲く季節でもあり「菖蒲

の節句」とも呼ばれている。古代中国では「午」と「五」は同音であり、五月最初の五日の日を意味し、蓬の人形や菖蒲を門に飾ったり菖蒲酒を飲んだりして、邪気と

た。また、汨羅（べきら）の淵に身を投げた屈原（くつげん）の故事にならって、粽（ちまき）を食べた。それが古代日本に伝来し、貴族社会にも受け入れられ、やがて民間にも広まったとされている。

その一方で、民間には、五月が田植え月であることから、この日に神祭りや物忌（ものいみ）をする行事

定着したものである。さて、かつての青森県内でみられた端午の節句の行事としては、菖蒲や蓬での屋根葺き、菖蒲湯、畑のモグラを追い出す子供達の菖蒲打ちなどがあった。現在では、男の子が生まれた家や男の子がいる家で、鯉のぼりを庭先に立てたり、武者人形を室内に飾ったりするのが全国的な傾向であり、

端午の節句の主役は？

清野 耕司

（県民生活文化課

県史編さんグループ

主幹）

もあった。例えば、五月四日の夜に、屋根に菖蒲を葺いた家に女性がこもる「フキゴモリ」「女の晩」「女の家」などと呼ばれる習俗で、これを柳田国男は、田の神の奉仕者である女性達が、宵節句の一夜だけは男性を排除して特定の家にこもり、神とともに食事をする物忌の日と推測している。

端午の節句の主役は女性だったとするのは性急に過

日に、家の軒にシヨウブとヨモギを差した。また二尺ほどのわらにシヨウブとヨモギをくるんで細縄で縛り、半尺ほど残したしっぽをつかんでモグラ打ちをした。」とある。森山泰太郎著『日本の民俗 青森』によれば、南部では四日の前節句に、夕方、菖蒲・蓬を屋敷内の建物の入口にさし、その後は家の者は五日の朝食が済むまで外出できなかったという。先に述べた「女の家」の習俗をうかがわせる。また、菖蒲打ちについても、津軽では子供達が田畑の畝や家の回りを打って歩くと、稲の根つきがよくなるともモグラが畑の土を掘らぬともいう。



板柳町での再現による菖蒲打ち
（県史編さん民俗部会・櫻庭俊美氏撮影）